

[特集：東日本大震災]

## 新潟と東北の間で ～わたしと東日本大震災～

新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科 三澤 寿美

### はじめに

東日本大震災について、全国的なニュースとして大きく報道され、統計データ等で震災と津波によるその被害の大きさについては、数や映像の情報として伝えられているところです。したがって、東日本大震災による東北と全国の甚大な被害については各被災市町村の資料データや新聞、テレビなどの報道によって把握していただくことに譲ります。本稿では、このたびの大震災に際して新潟と東北の被災地との間で、わたし個人が日本人として、女性として、母親として、看護職として、支援者として、見たこと、聴いたこと、したこと、感じたこと、考えたことについて記憶を辿ります。そして、わたし以外の方の備えの手助けになればと思い、これらの体験からの気づきと教訓についてお伝えします。

わたしは、日本赤十字社の看護師養成のための基礎教育課程で育った看護職です。現行の本学看護学科の教育課程には災害看護学演習という卒業要件に必修の専門科目が配置されています。しかし、わたしが学生だった時代には、災害時の看護に関連する科目は全国的にはみあたらず、唯一、日本赤十字社の教育課程のなかに赤十字救護論(科目名の記憶は定かではありませんが)という科目として存在していました。それから何度も看護師養成の教育課程が変更されていますので、現在は赤十字であっても同様の科目は存在しないかもしれません。学生時代を振り返ると、同級生とともに、連絡船でしか行けない東京都大島へ重いテント道具を背負っての野外救護訓練、1m先も見えない吹雪の中でスキーをはいての雪上救護訓練、さらに、荒れ狂う房総の大波を横目で見ながらの水上救護訓練で単位を取得し、卒業にこぎつけました。どの訓練も高等学校を卒業したばかりの年頃の娘が学習するような内容ではないというのが実感でした。そんな基礎教育課程で看護職のスタートを切ったわたしがテレビの映像で未だ記憶として残っているのは、JAL123便が墜落した御巣鷹山、阪神淡路大震災の直後の黒煙に包まれている神戸の街、9.11の崩壊するツインタワー。そして、一番鮮明に、そして、被災地のその後とともにわたしの人生に刻み込まれたのは、東日本大震災直後の東北地方沿岸地域の市街地をのみこむ大津波です。この映像とともに、津波にのみこまれ生活の痕跡があと残ったかたもなくなってしまった街の姿、被災された住民の方々との出会い、肌で感じたその場所に流れる空気を忘れることはできません。

### 平成23年3月11日、そのとき

平成23年3月11日(金)、その日、わたしはできるだけ早く学内での仕事を終わらせて、定時には帰宅しようと考えていました。しかし、予定していた仕事は、いつものことながら何度も途中で緊急対応事項が入り、思いのほかはかどらず、午後になっても予定の半分も終わっていませんでした。午後2時30分から40分ころにかけて、それまでなかなかできなかった仕事関係の連絡のため、仙台市内の大学に勤務する教員2人にメールをそれぞれ送信していました。数日前から宮城県沖を震源とする震度4クラスの地震が起こっておりましたので、そのメールには余震に気をつけて欲しいことを事務連絡の内容に書き添えていました(このメールは震災後に電気が復旧してからも読まれることなく、約4か月が経過した7月の下旬に初めて開封確認されたことを知りました)。なぜだか余震が特に気にかかっていた。この大学では、東日本大震災で実家に戻っていた大切な在学学生を失い、校内の安全点検や補修のために授業開始と入学式を1か月遅らせて新年度を開始しています。また、大学が被災しても教職員も学生もボランティアとして支援活動を継続されています。

さて、メールを送信して、再び残った仕事を片付けようとしたそのとき、大きな揺れを感じました。長いその揺れに、日頃から強風で大きく揺れる第4研究・実習棟がまた風で揺れているのかと思いましたが、なかなかおさまりません。これは、また中越が震源か、それとも今度は下越か、と震源をより近い場所に想像しました。同時に研究室のドアを開け、廊下にてみると、他の研究室からも先生方が出てこられており、廊下に座り込んでしまう先生もいました。そうこうしているうちに、どこかでテレビの電源が入られ、東北地方の太平洋沿岸地域の様子をテレビで生中継していることを知りました。新潟でも余震のような揺れが長く何度も続く中、ほんのしばらくテレビの画面を眺めていると、震源が宮城県沖であることと大津波警報を知らせるテロップ、そして取材中の記者の声とともに、画面では住宅地に押し寄せる太平洋の波が映し出されました。これは、今、現実に行っていることなのかと何度も自問自答しました。若い先生方は、テレビの画面に向かって、「早く逃げて」と声をかけていました。もちろんテレビに映っている沿岸地域の住民の方には、新潟からのその声が聞こえるわけがないことはわかっています。それでも、ただただ早く逃げて欲しい一心でテレビに向かって「逃げて」と声を出し、そして、手を合わせてただただ無事を祈ることしかできませんでした。

#### 【気づきと教訓】

大学の危機対応として、大学構内の各箇所緊急地震速報がキャッチできるシステムの設置、ニュース速報や災害情報が視聴できるテレビ、またはそれに準じる機器を構内各棟に設置することと、通常の携帯電話が使用不能になっても連絡が可能なように衛星携帯電話を準備しておくことが望ましいと考えます。

#### その日、自宅へ帰る

わたしの自宅は日本海側の東北地方ですが、内陸部です。新潟にいても、自宅のある地域は大きな被害を受けていないことをかろうじて確認することができていました。しかし、東北にいる家族とも、関東にいる家族とも全く連絡が取れません。固定電話も、携帯電話も、携帯メールも、どれにも応答がありません。家族の居場所が、新潟よりも震源に近いことが心配でした。中学校や大学の校舎は倒壊しなかっただろうか、都心に出かけていて帰宅困難者になっていないだろうか、高齢者の家族は無事だろうか……とるものもとりあえず仕事を終えて、東北の自宅に向かいましたが、出発はすでに午後5時を過ぎていました。日頃から磐越自動車道や東北自動車道を利用することはほとんどないのですが、この日も震源の場所から東北自動車道の通行止めを想定し、一般道で自宅に向かいます。このときすでに天候は雪。県境までに山道で途中停車しては、何度も家族との連絡にトライしながら、家路を急ぎます。それでも全く連絡は取れません。途中の道の駅で、部活動の遠征帰りと思われる高校生の集団と遭遇しました。高校生が携帯電話で話しています。震源から離れている隣県内陸部でも停電しており、信号機もなく、風雪の中、「車で走るのはスリルとサスペンスの世界だ」と、電話の相手に伝えていきます。この高校生の情報に感謝しながら、停電による自宅周辺の生活機能の停止をさらに想定し、途中のガソリンスタンドで満タンに給油し、再び、自宅に向かいます。途中通過した市町も停電しています。テレビ放送の音声で、かろうじて停電していない市があることがわかりました。自宅が停電していること、その周辺も停電してほとんどの機能が麻痺していることを確信し、停電を免れている近隣市を迂回して飲料水と非常食を購入した後、吹雪の中を自宅に向かいました。停電して信号機の点灯がない一般道を、衝突の恐怖を感じながら運転し、自宅に到着したのは午後11時頃。想像どおり自宅周辺は停電中で、街灯もなく真っ暗闇。余震の中、家族はフライパンに蝋燭を灯し、からだを寄せ合っていました。お互いの無事を確認し、中学生が学校の技術家庭科の時間に作成したラジオからの災害情報を聴きながら家族皆がリビングで眠った日が昨日のこのように思い出されます。このとき新潟にいた皆様は、暖かい自宅でテレビの画面で被災地の状況の速報をご覧になっていたことと思いますが、わたしの情報収集の手段はラジオと自家用車のアナログテレビでした。蝋燭の灯を見ながら、家族で行った福島県いわき市のアクアマリンふくしまのシーラカンスは無事か、宮城県松島の水族館は大丈夫か、潮干狩りの松川浦はどんなふうになったんだろう、水族館のバックヤードを案内してくれたボランティアのおじさんは無事だろうか、太平洋の海とその沿岸の被害と人に思いを寄せ、家族全員が心配を口にしました。

オール電化住宅の自宅の停電は、発災後約30時間後に解消されましたが、そのときにはすでに蓄熱暖房機も冷たくなっていました。この間、深夜電力で沸かしてタンクにためていたお湯も底をつきましたが、幸いにも断水していなかったため、キャンプ用のコンロを使ってやかんで沸かしたお湯を利用して、頭とからだを洗いました。バケツ2杯半の少ないお湯でも何とか全身を洗うことができることを確認しました。

#### 【気づきと教訓】

個人の危機対応として、停電しても情報収集できるように、テレビでニュースや速報を視聴できるワンセグ機能付携帯電話をもっておくこと。電力会社の電源に依存しない携帯電話充電用の機器も必要です。参考までに、のちにわたしはワンセグ付で、かつ自家用車のマイクとスピーカーに連動してハンズフリーで通話可能な携帯電話に機種変更しました。備えの物品として、ラジオ、暖房と煮炊きができる電気を必要としないストーブ、懐中電灯用の乾電池の定期的点検とストックが必要です。このたびの震災で、単一乾電池の生産は乾電池生産全体の数%となっていることをはじめて知りました。また、オール電化住宅の盲点を実感しました。電気がなくても3日間は自助で生きられる道具類と飲料水と食糧備蓄の準備が必要です。今回は、蠟燭とキャンプ装備が役に立ちました。また、停電中に冷凍庫のドアを開けなかったため、意外にも電気が復旧するまで食品は冷凍のまま保存されました。

#### 日本災害看護学会の先遣隊の一員として

わたしは阪神淡路大震災の後に設立された日本災害看護学会の設立当初からの学会員です。また、平成23年3月現在、この学会のネットワーク活動・調査調整部の部員でもありました。この部会活動では、日頃から東日本と西日本に担当地域を分け、それぞれの地域で発生した災害とその被災状況について調査するという役割があります。その関係で、3月11日の夜から12日夕方にかけて家族全員の安否が確認できたところで、3月12日夕方、日本災害看護学会ネットワーク活動・調査調整部の担当者に、部員として何かできることはないか携帯メールで尋ねました。なぜなら、今、東北の太平洋沿岸地域の被災地に一番近いところにいるネットワーク活動・調査調整部の部員はわたしだと思ったからです。その後、先遣隊の記録係として、被災地に調査に入ることになります。3月13日～3月17日の期間に、災害看護の専門家として全国的に有名な3人の先輩諸姉とともに、福島県、宮城県の現地に日本災害看護学会福島県・宮城県先遣隊第一次隊として赴きました。日本災害看護学会の先遣隊の役割は、被災現地において、そのとき現地で求められる支援を行いながら、現地の状況や保健医療ニーズ等に関する情報を把握し、その後の支援のために情報を発信することです。

13日の出発前には、停電後から住民の買占めが始まった自宅周辺の店舗で、被災地への支援物資を購入調達し、ガソリン缶には予備のガソリンを入れ、それらを自家用車のトランクと後部シートに搭載して、一路、福島県を目指しました。福島県の津波被害は浜通り地方でしたが、福島県災害対策本部が設置された福島県庁（実際は、福島県庁舎も被災したため、倒壊の危険性があり、災害対策本部は県庁舎に隣接する自治会館に設置されていました）に向かう中通り地方の道路も陥没や土砂崩れによる通行止めがあり、太平洋沿岸地域ばかりでないこの地震被害の大きさを思い知ることになりました。福島県災害対策本部を訪問したときにはすでに原発対策部がありましたが、このとき福島原子力発電所において爆発が起こって大変なことになっていたことは知らず、あとから知ることになります。また、わたしは十数年前に福島市において、福島県浜通り、会津、中通りの各地域で勤務する看護職の方々と一緒に看護教育の勉強していた経験があります。そのときの仲間の無事を祈りながら、郡山市にある福島県看護職能団体の事務所でお見舞いを申しあげ、福島市に移動し県警で緊急車両指定を受けた後、福島県から活動・移動拠点の山形市に、さらに宮城県に移動しました。先遣隊は、2台の車両を利用して活動しましたが、被災地2県内において、この2台の間で連絡を取り合うことに大変苦労しました。時間調整、通行止めや迂回路の情報共有のためには、お互い移動しながらの連絡が適宜必要でしたが、携帯電話は全く通じず、携帯メールも送信はできても、数時間も経過してから相手に何通もまとめて配信されるため、すべてのことが終了してしまってから相手に届くという状況でした。この体験ものちの携帯電話の機種変更の動機となりました。

宮城県では、岩沼市、名取市、亶理町、宮城県庁、宮城県看護職能団体事務所を訪問しました。被災県内、特に被災地域内では停電が続いていることもあり、電話、ファクシミリ、インターネットなどによる情報収集が困難な状況でした。さらに、県内であっても現地へ赴いて情報収集するには、ガソリンの不足のために遠方までの移動は不可能であることも重なり、情報収集が困難であることは明らかでした。また、ガソリン不足では、訪問看護ステーションを含む現地の看護職の活動が制限されている現状がありました。しかし、そのような状況でも、看護職の職能団体として、断水している地域住民の方にお手洗いを開放したり、休憩所を設置して住民に自由に利用してもらうなどの配慮により、地域のニーズに密着した貢献をされていました。

被災地の避難所は、おもに小中学校、高等学校、大学の体育館や校舎、公共施設などを利用し、開設されています。避難所に避難されている住民の方や高齢者施設の職員の方からもお話を聴かせていただきました。避難されている高齢の女性は、大津波警報で避難する途中に、いちご栽培のビニールハウスの窓を閉めに行った近所の方が行方不明であると話されました。ご自身も糖尿病を患いながら、膝の痛みをこらえながら避難されている状況ですが、避難する直前まで一緒だった近所の方を心配されています。高齢者福祉施設の職員の方は、施設から空港までの避難の状況について話されました。日頃から津波を想定して避難訓練を行っていたため、同じ設置主体の施設同士で連携協力し、全員を無事に空港まで避難させたこと、空港では航空会社の職員が4人一組になって階段を使って、暖房の入った上階まで高齢者を避難させてくれたことに感謝していること、どんなに景色がよくても海の近くに施設は建設しないことなど、専門職としての体験と教訓についてお話されました。

また、津波による浸水により、地域医療を担っている地元クリニックでは診療が不可能になっていました。患者情報を管理しているコンピューターは浸水により故障。クリニック内も床から約15cmの高さまで浸水し、水は引いていましたが、床は泥で敷き詰められています。このような状況のなか、避難所に避難されている受診歴のある体調不良の住民のために、院長が処方箋を発行することになりました。真っ暗闇のなかで懐中電灯と人の手だけでカルテ出しを行いました。クリニックの院長と日赤救護班の医師に協力して、1,000冊以上もあるカルテの中から、該当の住民のカルテを探し出すことがわたしたちの任務でした。

空港近くの大震災前に廃業したと思われるボーリング場は、遺体安置所となっていました。わたしたちは、そのそばを走る国道を利用して、訪問場所までの道を往復していました。親族と思われる方々が目を伏せながらボーリング場に入出入りされている姿が幾度となく目に入り、運転しながらその前を通るたびに心の中で手を合わせていました。先遣隊の記録係として、活動中には現地の状況を写真や映像で記録し、報告することを事前に助言されていました。しかし、被災地のどの場所でもわたしはデジタルカメラをカバンから取り出すこともシャッターを切ることも、どうしてもできません。調査が目的なのだからと、できなかったことを責められるかもしれませんが、わたしにはどうしてもそれができませんでした。

また、被災した現地を訪問すると、中越沖地震の際の状況と印象が異なることを感じました。まず、自衛隊や支援者の姿が見えないということ、次に仮設トイレの数が圧倒的に少ないということ、福祉避難所の設置がなく災害時要援護者が一般の避難所に避難されていることに気づきました。災害は災害の種類、発災場所、季節、時間などによって、その被害の程度や支援の内容が異なるということは、当然承知しています。中越沖地震では、どの避難所に行っても、学校のグラウンドには自衛隊の給水車や災害派遣関係車両、自衛隊員の姿があったのですが、今回はその姿も見えません。この時期、自衛隊は生活支援よりも行方不明者の搜索を優先していたためであることが、のちにわかりました。さらに、災害時に住民支援を行うはずの支援者、特に市町村の職員が数多く亡くなっていることや福祉避難所を設置するためのマンパワーの確保ができないこともわかりました。そのような厳しい状況にもかかわらず、現地の支援者の方々は精一杯力を尽くされていました。また、中越沖地震のときには仮設トイレが、全国からたくさん集まり設置する場所がなく広場に保管されていたのに、今回は、人口に比して圧倒的に数が少ないというのが率直な印象です。このことからトイレ使用の不自由さによって二次的に関連健康問題が発生する可能性が高いことが予想さ

れました。

#### 【気づきと教訓】

支援物資は、被災住民の特性を把握し、特性を考慮した生活に必要なものを準備します。一例として、高齢者や要介護者のために；使い捨ておむつ、お尻拭き、尿取りパッド、ティッシュ手袋、下着類、靴下、など。授乳中の母親と乳児のために；哺乳瓶、乳首、ミルク（通常のミルクとフォローアップミルク）、哺乳瓶消毒容器と消毒剤、レトルト離乳食、乳幼児用イオン飲料、母乳パッド、ガーゼハンカチ、使い捨ておむつなど。生活のために；使い捨てカイロ、ペットボトル飲料水、保存食（レトルトおかゆ、乾燥おにぎり、羊羹、飴など）、ティッシュペーパー、食品用ラップ、使い捨て紙皿とコップ、割り箸、手指消毒用アルコール剤とウェットティッシュ、生理用ナプキン、などを日本災害看護学会からの支援物資として避難所管理関係者に届けました。なお、日本災害看護学会先遣隊の活動については、日本災害看護学会ホームページをご覧ください。<http://www.jsdn.gr.jp/>

警報が発令されたときには、すみやかに避難を開始することが第一優先であると再認識しました。

福祉施設や医療機関の立地について、危機管理上の問題を十分に検討する必要があります。医療機関において患者情報を管理する場合は、コンピューター本体を床に設置せず、電子データを他の安全な場所（院内と専門に情報管理できる院外）にも、管理を徹底した上で保管しておくことが望ましいと感じました。

エコノミークラス症候群の予防、生活不活発病の予防、日常生活行動範囲の維持、人間の生きる意欲から考えても、排泄の自立とケアは重要です。そのためには、避難先でのトイレ環境を整備することが重要です。仮設トイレの数、様式が住民数や特性と合致しているか、設置場所の適切性や安全性は確保されているかなどについて考慮することが必要です。

支援者でありながら被災者である支援者へのサポート支援については、最も早急に検討しなければならない課題です。被災者であっても、看護職を含む現地の支援者はその役割や使命感から発災直後から昼夜問わず活動を行います。しかし、その活動は中長期的に支援者の心身に影響を及ぼし、健康問題に発展することがめづらしくありません。被災者への支援はもちろんのこと、早い時期からの支援者に対する支援についても、各専門職として検討しておく必要があります。

災害がいつどこで起こってもおかしくないという日本の現状においては、学生、教職員の安否確認とともに、地域に開かれた大学の地域貢献として、災害時に建物やグラウンドというハード資源、専門職集団である教職員と保健医療福祉専門職業人を志す学生という人的資源をどのように活用できるかについて至急検討する必要がある課題と考えます。また、被災地でのさまざまな調査の際に倫理的な配慮事項をどのように考え、実行するのかについて、今後も検討を必要とします。

#### 被災地の空気を肌で感じる体験～他県の災害ボランティアネットメンバーの代理として

4月上旬には、平時からの災害看護に関係する個人ネットワークにより、他県のボランティアのお手伝いとして、陸前高田市へ入りました。NPO法人災害ボランティアネット代表と、この代表とともに活動している他県職員に対して、被災された住民から把握した保健医療ニーズを伝え、その後の支援の継続と支援の内容を検討してもらうことを目的とする任務です。

一関市から太平洋の沿岸に向かって進みます。一関市の市街地でも建物のガラスが割れたり、壁が崩落していたりしています。さらに2時間ほど東を目指し鉄道の線路沿いを進むと線路の上に白い軽自動車が斜めにのっています。「えっ？ どうして車が線路の上に？ ここまで津波が？ なぜ？ 海が見えないのに……」。線路周辺にはヘドロのような泥が一面に広がる田んぼ。田んぼの泥の上には、家財道具、折れた材木、自動車の部品と思われる金属……さらに道を進めると、橋の欄干にたくさんの折れた材木と金属の破片と川原の草と壊れた生活用品がひっかかっています。「ここまで水が上がったんだ」。さらに先の丁字路に津波で流され壊れてしまった黒い小型の普通乗用車に陸前高田市の方向を示す看板が立てかけられています。そして、この看板の指し示す方向へ丁字路を右折した瞬間、その先に

広がる景色は、想像を絶するものでした。大津波の当日からその日までに、自衛隊が道路上の瓦礫だけは除いてくれており、かろうじて自動車がすれ違えるだけの広さの道路が確保されていました。しかし、ところどころは、道路にまで、折れた材木や壊れた家財道具、コンクリートの破片が積まれてはみ出し、車1台がやっと通れるような状態でした。海は見えません。しかし、3月11日のそのときまでにはあったであろう街は、家は、その土台を少し残しただけで、その姿はありませんでした。建物だけでなく地図に載っている道路も橋も形がありません。ここに住んでいた方たちは無事だったのだろうか、無事であって欲しい。わたしはボランティアネットの代表との待ち合わせ場所に向かうこの道を走りながら、涙が止まりませんでした。「こんな状態になる津波の中を逃げてくれてありがとう。よくぞ逃げてくださいました」そんなことをつぶやきながら目的地に向かいました。この活動では被災現地の保健師と面談し、災害時要援護者の保健医療ニーズを把握した上で、居宅の要援護者への支援計画、他県からの支援物資の内容について、他県職員に要請しました。この県は陸前高田市のひとつの町を担当し、県職員と専門職ボランティアの連携協力により数か月にわたって継続的に支援を行いました。

### 子どもの被災体験とその影響

今回の大震災をきっかけに、子どものころに体験した過去の被災体験が想起され、おとなとなった現在の生活に影響を及ぼす可能性が高いことを身近な人の話で実感しています。

子どものときに大震災を体験されたおふたりは、今回の大震災のあとお話をくださいました。おひとりの方は、小学生のときに大震災を体験され、強い揺れによって学校の校舎の上階からグラウンドに投げ出され壊れたテレビの記憶とともに、恐怖のために未だ同級生の安否を確認することができないとのこと。もうひとりの方は、震災時に公園で避難生活をした際に取り乱すおとなの様子に恐怖を感じた幼児期の辛い体験と今回の大震災の余震が重なり、繰り返す余震の中、よみがえる恐怖と向き合って毎日を過ごされていました。このおふたりのお話から、子どものときの被災体験は、ご本人も気づかないうちに一旦封印されたかのように見えます。しかし、成人しても再び同様の体験をすることによって、子どものときの体験や恐怖、そのときのおとなの混乱した様子や不適切な対応が、記憶として心の底から再び湧き上がり、現在の生活に影響を及ぼす可能性が高いということを実感しました。発災後の子どもの安全・安心のためには、まず子どもを支える親や保護者、身近なおとなが安全・安心であること、子どもの安全を確保した上で子どもと一緒にいて安心していられるおとなが側にいること、子どもにも発達レベルにあわせて事実を伝え、伝えた後は信頼できるおとなが側で見守っていくということの重要性を再認識しました。

#### 【気づきと教訓】

子どものケアを重視することを提言します。子どももおとなの様子や変化を敏感に察知しています。おとなが落ち着いて、冷静に行動し、安全・安心な環境を子どもに提供できれば、子どもの未来に影響すると考えられる被災体験による傷つきは最少になると思われます。

#### おわりに

##### ～日本人として、東北人として、看護職として、支援者として～

東日本大震災から半年が過ぎようとしています。これからは中長期の支援となりますが、わたしは被災地に赴いて活動することだけが支援ではないと考えています。新潟県内に避難されている方、東北の近隣県内に避難されている方も大勢います。したがって、わたしたちが居住している地元でも、被災されご苦労されている方々への支援は可能です。そして、被災地のこと、被災された方々のことを忘れないでいることが大切であると感じています。また、今年のわたしは、それまではあまり購入することのなかった福島県の桃や梨を購入するようになりました。福島県の特産物である桃は、例年よりも市場価格が低いように感じます。市場には放射線量の検査を通過したものしか出ていないはずですが、風評被害によって、価格を下げなければ消費者が購入しないという現実があるのかもしれませんが。また、他の商品でも、店舗では産地を表示するようになっていました。したがって、産地を確認し同じ商品が陳列されていても、産地が福島県、宮城県、岩手県と表示されているものを選びます。小さなことですが、甚大な被害を受けた

被災地の経済復興に少しでも役に立てればと思いながら生活しています。

東日本大震災は、想定はあくまでも想定でしかないことを知らしめました。子どもにも、大学生にも、シナリオどおりに動くことができるだけが最善ではないこと、現実を見極め、自分で判断して行動できるようになるためには、防災教育や減災教育のみならず、日常の教育が重要であることを痛感しています。看護職として、そして支援者として、要請があれば自分が見たこと、聴いたこと、したこと、感じたこと、考えたことを身近なところから広く伝えていきたいと考えています。それが、被災された方々への支援とこれから起こることが決して否定できない災害への備えにつながっていくものと信じています。

この稿を終えるにあたり、このような機会を与えてくださった和文誌編集委員長の島貫秀樹先生をはじめ編集委員会の皆様に感謝申し上げます。